

日本語教育国際研究大会の試み —名古屋調査から—

山田太郎（司会：山田大学）・山田次郎（山田大学）・山田三郎（山田大学）
山田今朝五郎（山田科学技術大学院大学）・山田四郎（山田大学大学院）
山田五郎（山田大学附属日本語学校）・山本花子（山本大学大学院）
山本次郎（山田小学校）・山本山子（山本大学）

1. 背景と目的

1.1 背景

ことばは人と人の中に新しいつながりをつくる。それによって、この世界はより豊かな社会になることができる。そんなことばの教育として日本語教育を考えてみるとどうなるのだろうか。

日本語教育は、外国語、第二言語として日本語を学ぶ人と教える人だけのものではなくなる。日本の、そして世界中の日本語を使っている人、自分自身は日本語を使わないけれど、日本語を使う人と接している人…、いろいろな人といっしょに、なぜ日本語を学ぶのか、なぜ日本語を教えるのか、それをもういちどゼロから考え直してみたいと思う。

1.2 目的

開催の背景・経緯日本語教育国際研究大会^{注1}は、日本語の教育と研究について、国境、地域を越えた協力と情報交流を推進することを目指して、1998年3月に東京で開催された国際シンポジウム「地球時代の日本語教育ネットワーク」を皮切りに、1999年にボストン（米国）、2000年ソウル（韓国）、2002年天津（中国）、2004年東京、2006年ニューヨーク（米国）、2008年釜山（韓国）、2009年シドニー（豪州）、2010年台北（台湾）、そして、2011年8月には天津（中国）で開催された。2002年大会（天津）では、五つの国と地域の代表により「日本語教育グローバルネットワーク」（GN）結成の覚書が交わされ、1ページ1段目には34行入る。ここで「ページレイアウト」「区切り」「段区切り」を挿入すると、多少レイアウトが変わっても35行目が入らない。こうなる

日本語教育活動の連携協力態勢を進めてきている。GNの参加国・地域は、2011年8月現在、九つの国と地域となっている。

2012年は日本語教育学会の創立50周年の節目の年に当たるため、2012年国際研究大会を日本で開催することを2009年開催のGN代表者会議^{注2}において提案し、本大会の開催が決定したようだ。

2. 日本語の視点から

2.1 目的

会長挨拶日本語教育学会会長尾崎明人日本語教育学会が誕生して半世紀。これまで世界中で日本語教育の実践と研究が積み重ねられ、その成果を共有するために日本語教育国際研究大会（ICJLE）が開催されてきた。しかし、21世紀のグローバル化時代を迎え、日本人と外国人が接触する場が確実に増えている現在、日本人も日本語教育の対象に含める必要がある。また、世界の日本語教育をグローバルに捉え、その体制整備に協力することが日本にとってますます重要になっている。

このような認識をもとに、2012年名古屋大会は日本語教育の意義と役割を広く日本の方々を知っていただく場にもしようと計画している。一人でも多くの方の参加を心からお待ちしている。

2.2 結果

実行委員長挨拶実行委員長小林ミナ 2010年秋に実行委員会が立ち上げられて以来、私たちは大会コンセプトについて「夢」を語り合ってきた。そのさなかの2011年3月、日本は未曾有の大震災に見舞われた。日本語教育に何ができるのか。ここが34行目。

大震災をきっかけに私たちはさらに議論を重ねた。たどり着いた答えが冒頭の「開催趣旨」であった。

どのような価値観を持って社会を作りあげていくのか、それを語り合うにはことばが必要だ。では、そのようなことばを教えたり学んだりするというのはどのような営みののだろうか。「ことばの教育」に携わる者すべてが立ち戻るべき原点だと考えた。

名古屋大会で皆さまと「夢」を語り合うことを実行委員一同楽しみにしている。

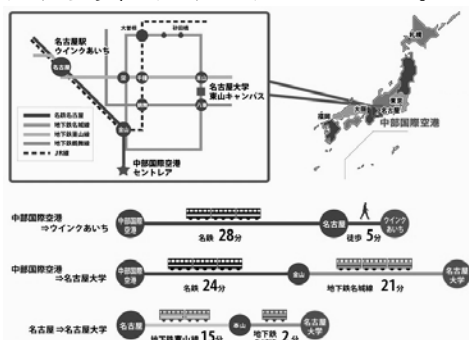


図1 タスク課題の一例

3. 教育の視点から

3.1 目的

発表者各位 2012 年日本語教育国際研究大会実行委員会 2012 年日本語教育国際研究大会発表要旨原稿提出のお願いがある。この度は、2012 年日本語教育国際研究大会にご発表のお申し込みをいただき、感謝申し上げます。つきましては、下記要領にしたがって予稿集発表要旨原稿を作成し、30 提出締切日までに提出くださいますよう依頼する次第である。

予稿集発表要旨原稿執筆要領・発表要旨は 2 段組み (A4 版) で、口頭・ポスター発表は 1 枚本文 1200 字程度、パネルセッションは 2 枚本文 2400 字程度の完成原稿となっている。以下の書式原則を守っていれば、ページ内での字数が上記を超えても構わない。用紙は A4 版で作成してほしい。ただし、予稿集には打ち出し A4 版を B5 版に縮小してダイレクトでモノクロ印刷するので、鮮明な原稿をご用意願う。40

3.2 結果

特殊な記号や文字をご使用の場合も注意してほしい。ここまでで 43 行

特殊な記号や文字をご使用の場合も注意してほしい。図表や写真等も、白黒の状態を必ずご確認ください。

表 1 事前事後テスト得点の推移

	A	B	C	D
事前	4	5	6	7
事後	4	3	8	8

4. 教材の視点から

4.1 目的

原則を以下に記す。書式例は別紙を参照してほしい。なお、予稿集冊子は黒白 2 色での印刷となる。原則を以下に記す。書式例は別紙を参照してほしい。なお、予稿集冊子は黒白 2 色での印刷となっている。提出前に必ず確認してほしい。

4.2 結果

特殊な記号や文字をご使用の場合も注意してほしい。図表や写真等も、白黒の状態を必ず確認してほしい。

5. まとめ

要旨にはデータ、結果の考察を含める。「結果については後日、大会で発表」というような形にせず、完結した体裁を取る。

以下の原則に則っていない場合は、修正の上、原稿の再提出を求められることがある。特に、拡張子「doc」の MS-Word 形式版で作成すること。拡張子「docx」は不可となっている。また、原則を予稿集全体で統一させるため、委員会で直接原稿の書式を修正することがある。

注 1：日本語教育国際研究大会は 2012 年 8 月 18 日から 20 日にかけて開催される。

注 2：口頭発表は 19 日に行われる。

【参考文献】

山田花子 (2003) 『日本語の分析』, 研究出版
山本太郎 (2000) 「日本語の会話」『日本語教育』300 号, pp. 6-20 ここまでで 39 行